

資料室便り

交通の専門図書館 交通経済研究所資料室

■新着書棚から（新しく受け入れた資料の紹介）



『鉄道百五十年史』 （本編全5巻及び資料編）

原朗ほか編
交通協会の発行、交通新聞社販売
2025年2月／100,000円（税込）
所蔵箇所：信濃町・上野

本書は、日本の鉄道開業150年を記念して編纂された本編5巻・資料編からなる正史である。各巻は「創業から国有鉄道の誕生まで」「『帝国の鉄道』の形成・発展・崩壊」「復興期から高度経済成長期の鉄道」「交通市場の変容と国鉄の経営危機」「JRと民鉄の時代」と題され、時代ごとの鉄道の発展と社会的影響を多角的に描く。

約50年前の『日本国有鉄道百年史』が国鉄中心の社史的色彩を持っていたのに対し、本書は国鉄・民鉄・公営鉄道を横断的に扱う「総合鉄道史」を目指し、鉄道経営と技術の相互関係を重視するほか、地方鉄道や関連産業、災害対応、グローバル展開などの新たな視点も盛り込んでいる。また、当研究所も編纂に協力しており、交通専門の調査研究機関としての歴史や役割に触れられている。資料編は本編の理解と活用を支えるとともに、それ自体が有用な情報源として機能する。脚注や参考文献も充実し、詳細な情報検索が可能だ。

なお、本書は事前に来室予約をすれば、当資料室でもご覧いただける。鉄道史研究や実務の参考にぜひご活用いただきたい。（原）

■書庫のなかから（所蔵資料の紹介）

『みんてつ 運賃読本』

日本民営鉄道協会監修
サンエイジング発行
1981年1月
所蔵箇所：上野（一般公開中）

本書は、石油ショックによる物価高騰や大手民鉄の輸送人員の伸び悩みなどが顕在化するなか、運賃について総合的な視点で研究者が共同執筆したものである。昭和50年代頃、運賃についてどのような議論が行われていたかを知ることができる。

鉄道会社の収入の手段としての視点から定期運賃制度や外国の運賃制度など、利用者側の視点から運賃と利用者の選択や家計と運賃などについて分析している。定期運賃制度に関しては、明治19（1886）年に営業政策目的で国鉄の上等中等を対象として初めて運賃割引が導入され、その後、教育奨励政策のために通学定期、社会政策的な配慮に基づき通勤定期の運賃割引が導入された。昭和30年代以降、急激に増加した朝夕のラッシュ時に集中する通勤・通学輸送への対応のため民鉄の鉄道投資が行われ、大都市の民鉄輸送人員の60%以上が定期券利用者であることを考えれば、定期運賃を基本にして、都市鉄道の運賃制度を決める方向に転換する必要があると述べられている。また、外国の事例として、ハンブルグ運輸連合やパリ運輸自治公社が紹介されている。（古森）

資料室からのご案内

蔵書オンライン検索、新着図書・雑誌の情報、月別新着図書目録、所蔵社史・年史のリストなどは、資料室HP（<https://www.itej.or.jp/about>）をご覧ください。

担当：古森崇史、原祥太、土方規義、田邊由佳

